

最近の食肉をめぐる状況

(2026年2月報告)

【 項 目 】

I 牛肉価格の動向

II 豚肉価格の動向

III 消費・販売の動向

公益財団法人 日本食肉流通センター

最近の食肉をめぐる状況（2026年2月報告）

公益財団法人 日本食肉流通センター

当センターでは、センター公表の部分肉価格情報及び食肉関連の情報を分析し、最近の食肉をめぐる状況について報告しています。

今回は、2022年以降の国産牛肉・豚肉を中心とした部分肉価格の動向と食肉の消費・販売の動向について報告します。

I 牛肉価格の動向

和牛、交雑牛及び乳牛について、部分肉のうちロイン、ヒレ、トモバラ及びウチモモの4つの主要な部位の取引価格と枝肉の卸売価格に着目し、それらの価格の動きを比較しました。比較には、価格を指数化して相互の比較をしやすくし、用いた部分肉の価格データは、当センターが月ごとに取りまとめている首都圏の部分肉価格のうち、重量中央値を用いました。また、枝肉卸売価格は東京食肉市場の価格を用いました。

価格の指数化については、和牛チルド「4」、交雑牛チルド「3」、乳牛チルド「2」ごとに2022年を基準（100）として各月の価格を指数（以下「価格指数」という。）にしました。なお、「」内の数字は肉質等級を表しています。

1 和牛

和牛の需要動向について、枝肉の価格指数の動きでみると、12月が最需要期であるため、例年年末に向けて枝肉の卸売価格は上昇し、年明けに低下する傾向にあります。近年は、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりにより、低下傾向で推移するようになりました。特に、2024年は夏場を中心に大きく落ち込みましたが、2024年12月は前年を上回りました。2025年になると前年ほどの落ち込みはなく、12月も前年を上回りました。

この間の部分肉の需要動向について部位別の価格指数でみると、部位によっては枝肉とは異なる動きがみられました。（図1）

図1 和牛の価格指数(首都圏)

ロインは、輸出の主要部位となっていますが、国内需要では、高級な部位であるため、消費者の節約志向の影響を受けて低迷し、特に、2023年以降は価格指数が90を切る月がみられるようになりました。

ヒレも代表的な高級部位ですが、コロナ規制措置がなくなってホテル、レストラン等の営業が本格化してきた2022年頃から、需要が急速に回復して、同年後半

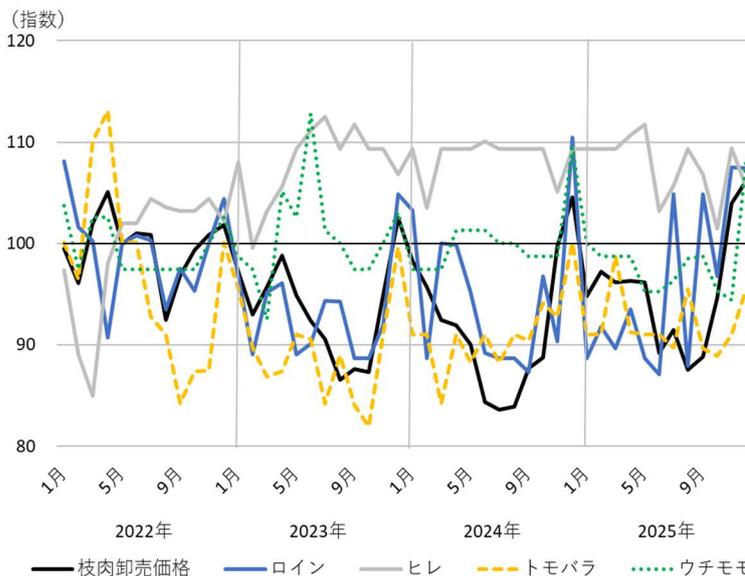
からは価格指数が100を超えて推移しました。その後は110程度で推移するなど、一時は食肉事業者から、ヒレが不足しているとの声もありました。

トモバラは、焼き材等として家庭内外とも需要が根強く、コロナ禍でも家庭需要に支えられて2022年前半までは、価格指数も100を超えて推移しました。しかし、その後、需要も一巡し、食肉業界では荷余り感があるとの声も出はじめて2022年半ばから100を割り込み、低迷して推移しています。

ウチモモは、赤身を特徴とし価格は比較的安く、需要が堅調であったことから、枝肉の低迷が顕在化する2023年以降でも価格指数は安定的な推移となりました。

2 交雑牛

交雑牛の需要動向について、枝肉の価格指数でみると、消費者の生活防衛意識の高まりの影響から、2023年に入ると指数は100を割って推移しましたが、同年末から需要が回復し100を超えて上昇傾向で推移しています。この時期には回復がみられなかった和牛の価格とは対照的な動きとなりました。



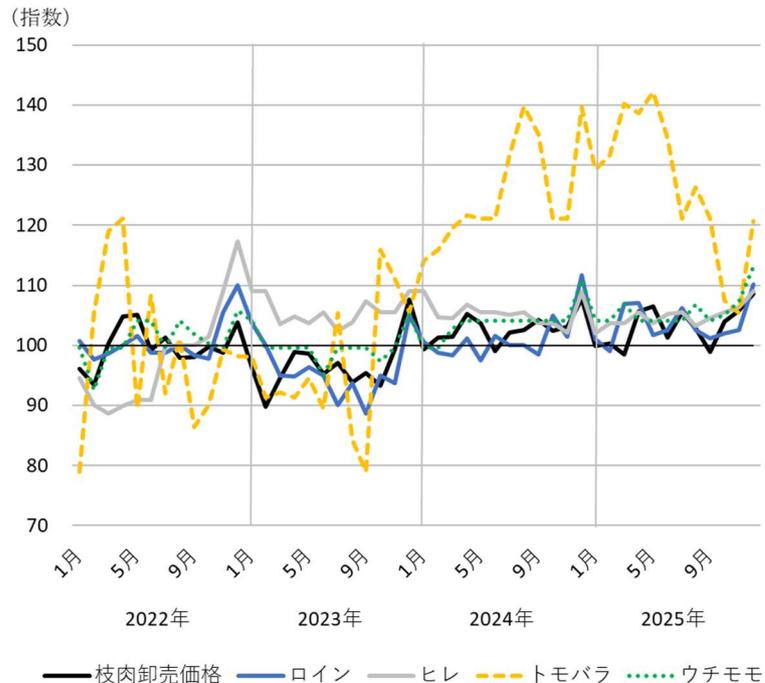
- 注 1.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100
 2.枝肉卸売価格の価格指数=各月の平均価格/2022年の平均価格×100
 3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の和牛去勢A4である。

部分肉の価格指数の動向をみると、ロインは、2023年から低下傾向となりましたが、和牛に比べて手頃な価格帯なことから需要は手堅く、2024年以降は指数が100を上回る水準に回復して推移しました。（図2）

図2 交雑牛の価格指数(首都圏)

ヒレは、和牛と同様に外食需要の回復に伴って価格指数は上昇傾向となり、2023年から100を超えて推移しました。

トモバラは、和牛と同様に2022年半ばから価格指数は下降傾向となりましたが、輸入トモバラの輸入量の減少や価格上昇の影響もあって交雑牛トモバラの引合いが強まり、価格指数は2023年10月以降大きく上昇しています。



ウチモモは、安定した需要に支えられて価格指数も安定して推移してきましたが、2024年3月以降は、やや高い水準で推移しています。

- 注1.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100
 2.枝肉卸売価格の価格指数=各月の平均価格/2022年の平均価格×100
 3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の交雑牛去勢B3である。

3 乳牛

乳牛の需要動向について、枝肉の価格指数でみると、2023年に入り低下傾向となり同年後半には大きな落ち込みとなりました。しかし、2024年になると価格指数は上昇に転じ、2025年12月の価格指数は112.2と高い水準となりました。

部分肉の価格指数の動向をみると、ロインは、和牛や交雑牛よりも手頃な価格帯であることから輸入品の代替となり、2022年半ばから需要が戻って価格指数は上昇傾向となり、100を超えて安定した水準で推移しています。（図3）

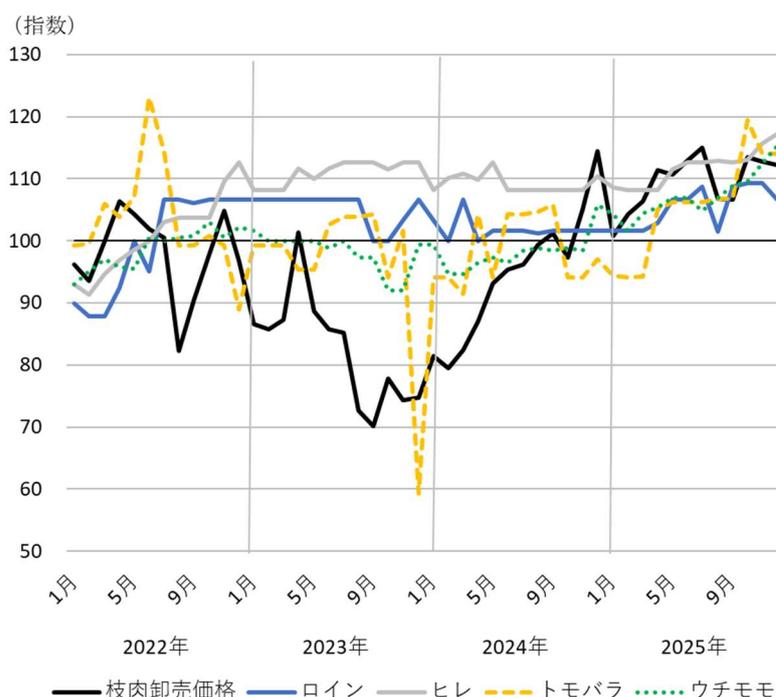
ヒレは、外食需要の回復に伴って2022年7月以降は100を超えて高い水準で推移しています。

食肉事業者からは、乳牛のヒレなどは値頃感があってもっと欲しい商品であるが、乳去勢牛の出荷頭数が年々減少して手に入りにくくなっているとの声が多くありました。

トモバラは、輸入トモバラの価格変動の影響もあって価格指数は上下しながら推移していましたが、2025年4月以降上昇し同年10月以降は110を超える水準となっています。

ウチモモは、経済活動の再開により2022年6月に100を超えたものの、その後は100を下回る水準で推移してきました。2024年12月以降上昇し2025年11月以降は110を超える水準となっています。

図3 乳牛の価格指数(首都圏)



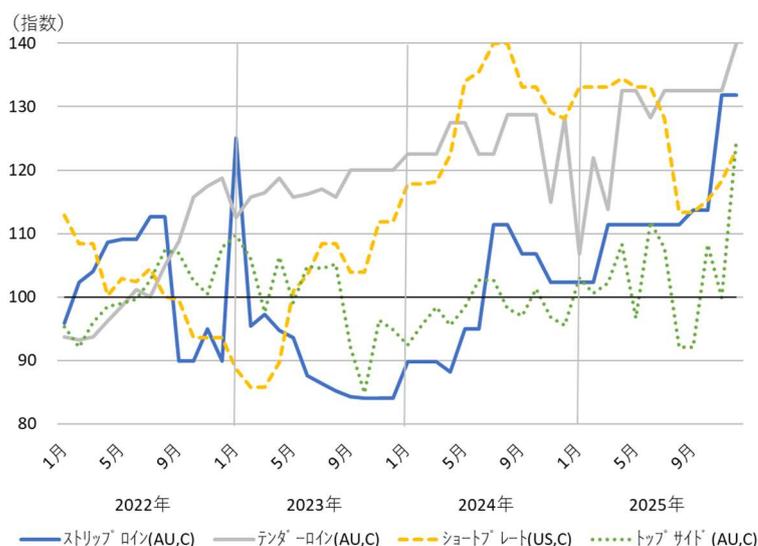
注1.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100
 2.枝肉卸売価格の価格指数=各月の平均価格/2022年の平均価格×100
 3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の乳牛去勢B2である。

4 輸入牛肉

為替の円安傾向、現地価格の高騰等による輸入牛肉価格の上昇に伴って、主な部位の価格も上昇しています。

このような上昇傾向の中で、2024年7月、8月にはトモバラ（米国産チルド・ショートプレート）、2025年12月にはヒレ（豪州産チルド・テンダーロイン）の価格指数が140.0に到達しています。（図4）

図4 輸入牛肉の価格指数(首都圏)



注.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100

II 豚肉価格の動向

1 国産豚肉

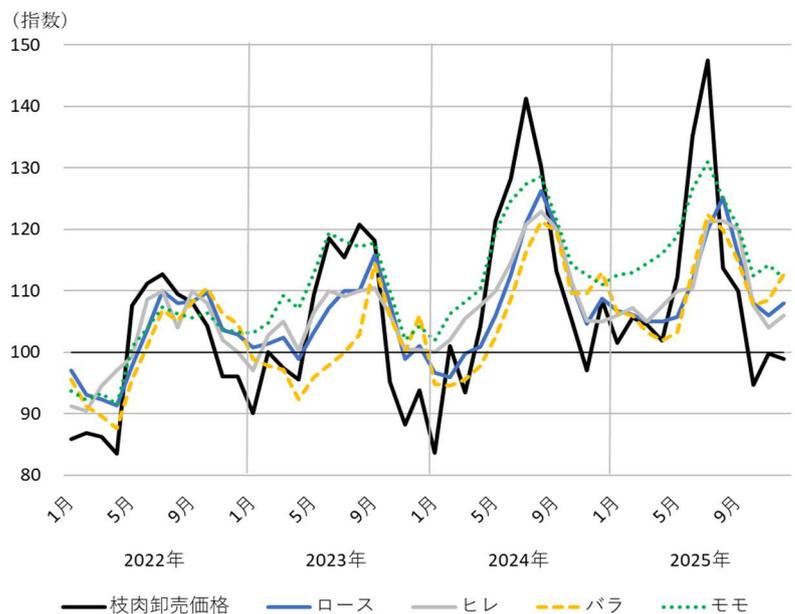
国産豚肉について、部分肉のうちロース、ヒレ、バラ及びモモの4つの主要な部位の取引価格と枝肉の卸売価格に着目し、牛肉と同様に指数化して動向を追いました。部分肉の価格データは、当センターの国産豚肉チルド「I」首都圏の重量中央値を用い、枝肉卸売価格は、東京食肉市場の「上」の価格を用いました。なお、「I」は、格付が「極上」及び「上」の枝肉から生産された部分肉であることを表しています。

国産豚肉の場合は、コロナ禍時は巣ごもり需要により需要が増えるという影響がありました。その後は、さらに輸入豚肉の価格上昇や国内の出荷頭数が減少したことにより、枝肉の価格指数は、夏場に高値となるという季節変動の振れ幅を大きくしながら上昇傾向で推移してきました。2024年7月には価格指数は140を超え、2025年7月には価格指数147.4（枝肉価格で867円/kg）まで跳ね上がりました。（図5）

部分肉の価格指数をみると、いずれの部位も枝肉と同じ動きで推移していますが、季節変動の振れ幅は枝肉よりも緩やかなものとなっています。この間、食肉事業者からは、ロースは売りにくく、場合によっては在庫を抱えてしまう一方で、モモは不足して加工用在庫が確保できない、との部位による需要の違いがあることについて声が多くありました。

このような需給動向の違いを反映して、同じような価格指数の動きをしていたロースとモモは、2023年に入ると、モモの価格指数がロースを上回って推移するようになっていきます。食肉事業者による国産豚肉の販売価

図5 国産豚肉の価格指数(首都圏)



- 注 1.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100
2.枝肉卸売価格の価格指数=各月の平均価格/2022年の平均価格×100
3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の上である。

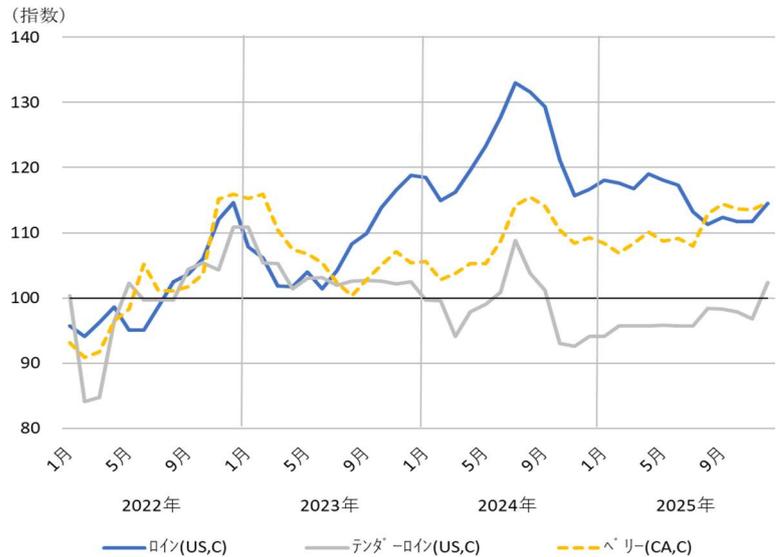
格は、短期での食肉市場の枝肉価格を反映する価格形成が主流ですが、その中で部位の評価が変わってきていることを示す動きとなっています。

2 輸入豚肉

輸入豚肉も輸入牛肉と同様に、為替の円安傾向、現地価格の高騰等の中で、主な部位の価格も上昇しています。

2024年7月の急激な円安による大きな価格上昇の後、価格は落ち着きますが、ロース（米国産チルド・ロイン）及びバラ（カナダ産チルド・ベリー）は、100を超えて高水準で推移しています。（図6）

図6 輸入豚肉の価格指数(首都圏)



注.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100

Ⅲ 消費・販売の動向

1 食肉関連の消費者物価指数の動向

食肉の小売価格の動向は、その消費に動きに大きく影響するため、総務省が公表している消費者物価指数（2020年を100とした指数）のうち食肉関連の指数について、Ⅰ及びⅡと同じ期間中の動きをまとめました。（図7）

食料の消費者物価指数は、2022年から顕著な上昇傾向となり、さらに2024年後半からは傾向を強めて上昇しました。その後一旦落ち着きますが、再び上昇し2025年12月には128.8となりました。

牛肉（国産品）の指数についても食料と同様に上昇傾向となりますが、その上昇割合は抑えられて緩やかなものとなっています。また、他の食肉と比べても低い上昇割合で推移し、2025年12月には115.7となり、食肉の中で最も低い指数となりました。

豚肉（国産品）の指数は、食料と同様に上昇し、2025年12月には127.7と食肉の中で最も高い指数となりました。

鶏肉の指数も上昇傾向で推移しますが、他の食肉と異なり2023年10月頃から緩やかな低下に転じたものの、その後再び上昇し2025年12月には122.4となりました。

以上のことから、この期間中は、食肉の中では、豚

肉価格の動きは食料全般と同じように高くなる一方で、物価高が続く中で、比較的価格が高い牛肉については、価格上昇が抑えられたかっこうとなっています。

2 家計消費の動向

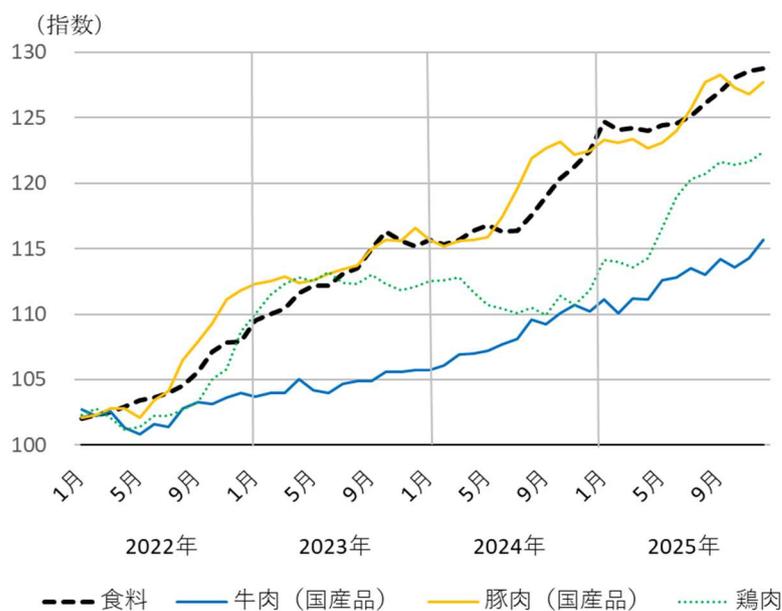
家庭における食肉の購入数量と価格の動きについて、総務省が公表している家計調査から追うことができます。Ⅰ及びⅡと同じ期間中の食肉の種類別購入価格・購入数量をまとめました。（図8、表1）

牛肉の購入価格は上昇（2025年／2022年比：107.2%）しているものの、他の食肉に比べ低いものとなっています。購入数量は減少傾向が続いており、2025年は2022年に対し87.1%となり、かなりの減少となりました。

豚肉の購入価格も上昇（同比：109.8%）しており、牛肉に比べて上昇割合は高いものとなっていますが、購入価格は牛肉の4割程度の水準です。購入数量は2024年までは減少していたものの、2025年には増加したため、2022年に対し99.3%となりました。

鶏肉の購入価格も上昇（同比：112.8%）しており、牛肉や豚肉に比べて上昇割合は高いものとなっていますが、購入価格は牛肉の3割弱、豚肉の7割弱の水準です。購入数量は2023年に減少したものの、2024年から増加し、2025年は2022年に対し103.0%

図7 食肉の消費者物価指数



資料:総務省「消費者物価指数」(全国)により作成。

注:指数は、2020年平均を基準(100)としている。

と増加しました。食肉の購入の中でみると、より安価な牛肉→豚肉→鶏肉にシフトしている傾向が続いています。

この結果、この期間の家計消費における支出金額の伸びは、鶏肉が最も高く(116.2%)、続いて豚肉(109.0%)となり、牛肉は減少となりました(93.4%)。

図8 食肉の購入数量・購入価格

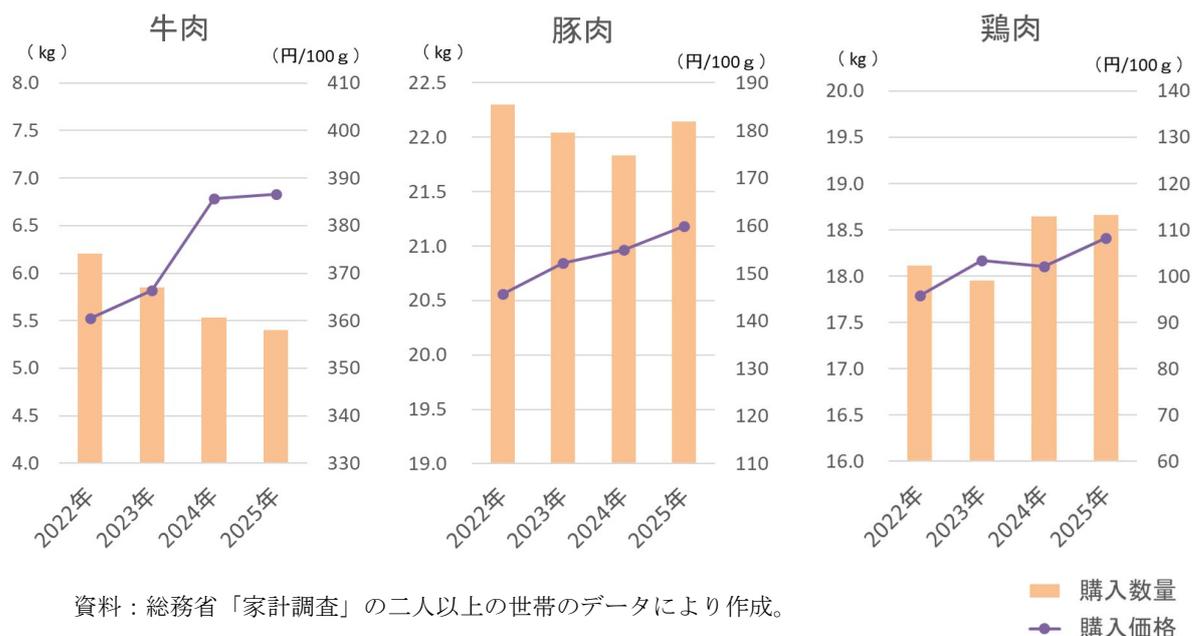


表1 世帯当たり年間の購入数量，支出金額及び購入価格

	2022年	2023年	2024年	2025年	2022年比 (2025/2022)
食料支出金額 (円)	982,661	1,038,653	1,079,228	1,138,736	115.9%
生鮮肉					
購入数量 (g)	51,089	50,193	50,350	50,618	99.1%
支出金額 (円)	78,259	79,811	80,658	83,265	106.4%
購入価格 (円/100g)	153	159	160	165	107.4%
牛肉					
購入数量 (g)	6,202	5,853	5,529	5,401	87.1%
支出金額 (円)	22,356	21,449	21,321	20,880	93.4%
購入価格 (円/100g)	360	366	386	387	107.2%
豚肉					
購入数量 (g)	22,297	22,041	21,835	22,142	99.3%
支出金額 (円)	32,487	33,553	33,818	35,416	109.0%
購入価格 (円/100g)	146	152	155	160	109.8%
鶏肉					
購入数量 (g)	18,117	17,949	18,643	18,659	103.0%
支出金額 (円)	17,372	18,558	19,033	20,182	116.2%
購入価格 (円/100g)	96	103	102	108	112.8%

資料：総務省「家計調査」の二人以上の世帯のデータにより作成。

(問合せ先)

公益財団法人日本食肉流通センター

情報部 安藤

電話：044-266-1172